

令和八年度（二〇二六年度）

福岡女子大学第七十七回入学式及び

大学院第三十四回入学式

式辞

本日ここに、服部誠太郎福岡県知事、福岡県議会議長代理 高橋義彦文教委員長をはじめとするご来賓の方々のご臨席を得て、第七十七回入学式及び大学院第三十四回入学式を挙げていきますことを大変うれしく思います。

学びの場を求めて遙か海外から来られた留学生を含む学部入学生二三九名、大学院入学生十六名、お一人お一人を心から歓迎いたします。また、海外の交流協定校から派遣され、現代日本の社会と文化を学ぶ国際プログラムに参加される十九名の留学生、そして同じく協定校から学部受入の交換学生として専門課程で学ぶ十三名の留学生、あわせて三十二名の留学生が、この式典に参加されています。ようこそ福女大（FWU）にお越しくださいました。

この三月、私はある高等学校に招かれて卒業式に出

席いたしました。儀式の最後に、合唱がありました。

「仰げば尊しわが師の恩／教えの庭にもはや幾年」と卒業生が歌えば、「別かるる後にもやよ忘るな／身を立て名をあげやよ励めよ」と先生たちが激励の言葉で応える、若者と人生の先達との間で交わされるこの声のやりとりに改めて感動いたしました。大学は、その期待に違ふことなく、学びに励む、刺激的で創造的な環境を皆さんに提供せねばならない、と思い直した次第です。

ご安心ください。福岡女子大学は、国際文理学部の名前が示すとおり、文と理の領域を横断的に学べる教育体制を敷き、将来を担う皆さんにこれからの社会が求める、幅広い教養と専門的知識を深め、そしてそれらを社会的課題の解決に適用する姿勢と心構えを育てる教育環境を整えています。実践的に行う体験的学習なども備えています。

キャンパスの国際化にかけては、いずれの大学にも劣りません。ここには九十人近い留学生がともに学んでいます。また、力を蓄えて、自ら手を挙げ、海外研修や提携大学への留学を実現し、グローバルな視野を持つ人になってください。海外に行かずとも、留学生とともに

に合宿するイングリッシュ・ビレッジや、先輩たちが自主的に運営している多言語のランゲージ・カフェも準備されています。福女大は、こうした言語学習と異文化の交流活動を強く支援しているのです。

さらに、本学の長所に学部初年次全寮制があります。全国の学生たちの中でも、皆さんが享受できるまなな生活習慣と個性を持つ人たちと共住・共生し、寛容な心を育み、多文化理解と多元的なものの見方を身につけていただきたいと思います。家庭を離れ、程よい孤独の中で、ルームメイトと語り合い、あるいは一人静かに考えを深める絶好の機会となるでしょう。

ヨーロッパにおける大学の始まりは、学生と教師とが寝食を共にし、互いに学び合う組織でありました。学生たちと教師陣とが契約のもとに「一つになった」(これがユニヴァーシティの語源です)組織です。学生は出身地に応じて、ネーション(いわば県人会ですが)を組織して、絆を強め、友好を図ったのです。福女大の寮は、こうした大学の始まりの姿を、現代に蘇らせる一つの試みであると言えるでしょうか。全寮制に託した理念をしっかりと理解した上で、寮での生活を楽しくてください

い。すべての主役は、皆さんです。

忘れてはならない大事な特色がもう一つあります。自明のことですが、本学は女子のための大学であることです。百年前、九州帝国大学は未だ女子の入学を認めていませんでした。福岡の婦人たちがこの地に高い教育の機会を求めて、立ちあがったのです。時の知事はこの運動に理解を示し、女子高等教育機関の設置を議会に提案しますが、女子には高等教育は不要として、否決されます。しかし数年の時を置いて、知事は再度提案し、晴れて公立として全国初の女子専門学校の創設が叶いました。一九二三年のことでした。女性による女性のための学校の誕生です。この気概は、本学百年の伝統の底流に流れ、「ないものを描く、ないものは創る」という大学の人材育成像となっています。今なお女子大学であり続ける意思と力はここにあり、学生、教職員、卒業生の拠りどころです。入学を果たされた皆さんにも、この福女大スピリットを持っていただくこと、男女共学の大学にはなくて、女子だけで学び合う、女子大学の強みを意識していただきたいと思えます。これが本日の大きな約束事です。

大学は好きなことを見つけ、それを極める場でもあります。大学院に進学される方は、好きをさらに極めたい、と願う進学者もいました。皆さんを待ち受ける教員は皆、自らの関心ごとを追求し、研究することの醍醐味を味わい、その成果をもって社会に革新をもたらそうとする人たちです。その面白さを若い世代に伝えたいと願う人たちでもあります。進んで教員に働きかけ、また働き返されて、自身が依って立つ世界をこの福女大でしっかり作り上げてください。

ささやかながら私が研究活動の過程で、「やったあ！(ユリーカ)」と喜びの声をあげた経験を一つお話ししたいと思います。私は、イギリスで初めて黒、赤、青、黄色の多色刷りで印刷出版された本を大英図書館で手にしていました。この本は、グーテンベルクの発明から遅れること三〇年、一四八六年にロンドン郊外の修道院で出版され、騎士が心得として身につけねばならない、鷹狩(Hawking)、狩りとその用語(Hunting)、紋章学(Heraldry)を扱う、中世伝来の書物です。以後、紳士必携の書として、シェイクスピアが活躍した頃までに一五度(たび)も版が重ねられたことが知られています。

これらの本を比較検討する中で、『紳士のアカデミー (The Gentlemen's Academie)』というタイトルを与えられた一五九五年版のページをめくることになりました。五五枚目の次から数枚番号が乱れ、そして再び五七、五八、五九と順序正しく振られているのです。既に活字が組み上げられ、印刷をし終えた後に、突然に文書の挿入が行われたようです。なぜ、この箇所にも暴力的に文書が挿入され、そしてそこには何が書かれているのか。ここからが文学探偵の始まりです。この文書は、当時疑問視されていた、女性を仲立ちに爵位の受け渡しが行われた、とある家の爵位の正当性に根拠ありと主張するものでした。元となった手書きの原稿も大英図書館で見つけ出すことが出来ました。

それでは、なぜほかならぬ五五枚目の後なのか。先ほど、この本は、鷹狩、狩りの書、紋章学の書の三部作であると申しました。爵位継承の正当性を論じるのに、皆さんなら、この本のどこに挿入するでしょうか。権威づけを行うには、紋章学の箇所が最適ですね。イングランドの主要な家系について一連の紋章デザインを紹介が終わり、それを解説する文書との間にこそそ

り忍ばせ、伝統ある書物を巧みに利用して、爵位を守ろうとしたのです。このように私の探求は、偶然の出会いから一つの成果が生まれたのでした。

本学で学ぶ過程で、先生方からは、もっと刺激に富む話が聞けるはずです。理系の学問を選ぶ人は、仮説を立て、それを実験や調査で証明する喜びがあるでしょう。文系の人なら、資料を新しい視点から読み直す楽しさや、偶然の発見に浴するかもしれません。また、文と理の知見を融合させ、社会的課題に解決を図る喜びを知ることになるかもしれません。

ここまで大学での探求の楽しみを中心に話しましたが、福岡女子大学の学生としてのプライドを持ち、寮生活やゼミの中で生涯の友人を見だし、サークル活動（是非、何かのサークルに加わってください）を通して、自己の生き方を肯定し、豊かで刺激に富む大学生活を過ごされることを祈念して、式辞といたします。

令和八年四月三日

福岡女子大学学長

向井剛